Petavatthu 註における善業と悪業

藤 本 晃
(広 島 大 学)

I 序 論

南伝パーリ三蔵の小部經典 (Khuddaka-Nikāya) に収められる Petavatthu (餓鬼事, Pv) は、餓鬼 (peta) に関する五十一の物語を全編偈頌の形で説いた物語集である。その骨子は、現世の餓鬼の苦しみとその前世の悪業を記述することにより悪因苦果の因果法則を示し、在家信者が悪業を離れ善業を行うように導くことにある。

Pv 全五十一話の中でも第四章第一話 (IV.1) は、悪業を離れ善業を行うことについて、悪業の果報は善業によって消し得ることを示した唯一の物語として注目される。⁽¹⁾ IV.1は八十八偈から成るアンバサッカ王⁽²⁾の物語の中に善因楽果、悪因苦果を対比させて効果的に記述し、因果応報の理を信じず悪業を恣に行っていた王が、大威力を持つ餓鬼や長老の教えを通して徐々に悪業を離れ布施、持戒などの善業に親しむようになり、遂には預流果を得るに至る物語である。

以下、Pv IV.1を Dhammapāla (A. D. 6C.) の註を参照しながら分析し、悪業の者を善業に導く教説、特にその理論的根拠となる業の果報の消滅⁽³⁾について考察する。

II 物語の概要

IV.1の註は、偈の前に王と餓鬼との出会いの因縁を説く。

ヴェーサーリのある商人の甥は他人の家から品物を盗み、商人の店に置いた。品物の持ち主は商人と甥を捕まえて、来世を信じない (natthikavāda) アンバサッカラ王に奏聞した。王は商人を斬首刑にし、甥を杭に刺した。

後日王はある男の妻を自分のものにしようと企み、その男を召して、日没までに戻らなければ処刑だと言って遠方に使いに遣り、男が日没直前に戻って来たので、城の門を先に閉めさせた。男は城の外で杭に刺されている甥に自分が日没前に戻った証人になるよう頼むが、甥は、自分よりも自分の処に毎夜現れる餓鬼に頼むよう勧める。翌朝王が男の処刑を宣告した時、男は自分が日没前に戻ったことを訴え、証人として杭に刺された甥の前に現れる大威力の餓鬼 (peto mahiddhiko) を指名した。その晩も現れる筈の餓鬼の証言に、王が自ら立ち会うことになった。⁽⁴⁾

こうして王と餓鬼の対話を中心にした物語が前半の偈1から偈40まで続く。ここでは餓鬼の導きにより王が善悪業とその果報を信じ、善業を行う気持ちになる。後半の偈41から偈88では、王と長老との対話を中心とし、王が善業を積み、悪業を消滅し、預流果を得たと説かれる。偈文による物語の大要は以下の通りである。

偈1-10：餓鬼は王に、杭に刺された甥が自分の為した悪業のため来世には地獄に墮ちると告げる。

偈11-14：餓鬼に興味を持った王は、餓鬼自身の業と果報を問う。

偈15-21：餓鬼は、自分が前世に行った善悪業と現世で受けている苦楽の果報を王に話す。

偈22-29：餓鬼は王に、自分は戯れに行った悪業のため餓鬼になった

が、もし戯れでなく邪心を持ち、身語も汚れた人が悪業を行えば、死後疑いなく地獄に墮ちること、善悪業には必ず来世の善趣悪趣が果報として得られること、更に同じ人界の中でも優劣が果報として得られることを説く。

偈30-36：餓鬼は王に、布施と回向を勧める。王は餓鬼に業の果報を信じる餓鬼がなぜ裸体という苦果を受けているのかと問い、餓鬼は自分が衣服を得られるような善業を前世ですでにせず、更に餓鬼としての現世では、衣服を長老などに布施してそれを自分のためにと回向してくれる人がいないからと応える。王は自分が長老に布施し、餓鬼のために回向をすると申し出る。

偈37-40：王は翌朝、施物の衣服を用意して長老の処へ行く。

偈41-45：王は自ら名乗り、長老に衣服の布施を申し出る。

偈46-49：長老は沙門バラモンに対する王の以前の悪業を挙げ、王の心境の変化を問う。王は以前の悪業が戯れのためであって、邪心からではないことを強調する。

偈50-55：王は餓鬼のために長老に衣服を布施し、それが餓鬼に届くようにと願う。布施を受けた長老は、施主である王を讃え、王の布施が餓鬼に届くようにと願う。王の目の前に衣服で荘嚴された餓鬼が現れ、王は善業の果報の素晴らしさを目の当たりにする。

偈56-69：王は更に善業を積むことを決意し、餓鬼と友人になる。餓鬼は杭に刺された甥の釈放を王に願い、王は城に戻り釈放する。

偈70-74：王は釈放した甥の悪業の果報について、彼が地獄を免れる方法、業が減ることがあるかと長老に問う。長老は、彼が教法を實踐し、昼夜に怠らず励むなら、地獄を免れると応える。

偈75-81：王は自分は地獄に墮ちずに済むかと問い、長老は、三帰、五戒、八齋戒を受持し、法衣、飲食、臥座具などを常に清らかな気持ちで比丘たちに布施し、このように教法を實踐し、昼夜に怠ることがなけ

れば、王も地獄を免れると応える。

偈82-85：王は長老の言葉を繰り返し、受持する。

偈86-88：王は比丘サンガに奉仕して預流果を得、甥は長老について出家してアラカン果を得た。⁽⁵⁾

III Petavatthu IV.1 に説かれる善業と悪業

III.1 前世から現世への業とその果報——餓鬼の例——

前世の悪業を因として、その苦果を現世で餓鬼として受けるという悪因果の因果法則を、Pv のほぼ全ての物語は記述する。IV.1では偈15から21に大威力の餓鬼の例として説かれる。ここには餓鬼が大威力を持つに至った善因楽果も示される。餓鬼と王の対話の中で以下のように説かれる。

餓鬼「荘厳された天馬は私〔餓鬼〕が前世で泥道に牛の骨を置き、人々を通り易くした業の果報、身体が輝いているのは、怒りなく浄心を保っていた業の果報、香気に満ちているのは、教法を実践する人々の名声を自分も讃えた業の果報、裸体で苦しんでいるのは、戯れに、邪心なく (khiḍḍatthiko no ca paduṭṭhacitto) 友人の服を隠して困らせた業の果報です⁽⁶⁾」

これらの善悪業と苦楽の果報は、前世の因が既に現世で果報を結んでしまったものである。この場合、餓鬼が現に受けている苦楽の二果を王は直接確認できる。

III.2 現世から来世への業報因果——餓鬼の甥の例——

Pv IV.1には、上記の因果法則に加え、現世で作った善悪の業のために来世でその果報としてこれこれの境遇を得るであろうという予想の形で、現世から来世への業報因果も説かれる。⁽⁷⁾これは、品物を盗み杭に刺された

餓鬼の甥に関して、偈1から10の餓鬼と王の対話の中で述べられる。

王「この者には臥座具も飲食も衣服も移動の自由もなく、親族知友にも見捨てられ、今日明日にも命を落とすであろう。それなのになぜあなた〔餓鬼〕は彼に『生きている方が好い』と言うのか？」

餓鬼「この者は前世で私の甥でした。この悪業を為した（dukkata-kamma）者はこの世で死んでから恐ろしい地獄に生まれます。この杭はその地獄の苦しみより遙かにましです。だから彼に『生きている方が好い』⁽⁸⁾と言うのです」

甥は窃盗の果報を、杭に刺されて既に現世で受けているのに、来世では地獄に堕ちて更に苦しまなければならないと示される。現在の自分の行いを反省し、この物語を聞く者に今のままでは来世の果報はこうなると想像させ、悪を離れるように導く説き方である。

王の来世の果報についてはここでは予想されていないが、王のこれまで行ってきた業因として他人の妻を奪おうと不邪姪を企んでいることは、因縁譚に既に示されている。また後に長老に布施をする時に長老の述懐として明らかにされるのであるが、王が嘗て沙門バラモンの鉢を割り、衣を裂き、足を掛けて転ばせ、油一滴の布施もせず、更に迷い人に道を教えず盲者の杖さえ取り上げた悪業が偈46から48に示されている⁽⁹⁾。明言されていないが、王の来世の果報も餓鬼の甥と同様に悲惨なものになるであろうということが、物語を聞く者には容易に想像できる。

III.3 業と果報の因果法則の信順

善悪業とその果報を二通りの方法で示された王は、因果法則や来世というものがあるのではないかと思ひ始め、餓鬼と二度問答し、答えを突き付けられる。一つは偈22から24に、

王「戯れに悪を行い、〔餓鬼の裸体という〕果報があるなら、戯れでなく行えばどうか？」

餓鬼「邪な心を持ち (duṭṭhasāṅkappamaṇā) 身語が汚れている人は死後來世で疑いなく地獄に行き、善趣を求め、布施を喜び慈悲深い人は死後來世で疑いなく善趣⁽¹⁰⁾に行きます」

と、餓鬼が善業悪業の者の来世の行き先を、一方は人または天の善趣、他方は地獄と二つに峻別する。ただし悪業の者を更に心のあり方で細分し、戯れに悪を行うなら餓鬼に、邪な心で行うなら地獄に生まれるとしている。仏教では意業を特に重んじるからであろうか。Pv IV.1の物語では、この立場は一貫している⁽¹¹⁾。

それでも業の果報を納得できない王は、偈25から29で更に餓鬼と問答する。

王「善悪業の果報をどうすれば信順できようか？」

餓鬼「善悪の果報を見、聞いて信順して下さい。善悪がもしないとしたら、衆生の善趣または悪趣に行く者がいなくなってしまう。人界における卑賤高貴もなくなってしまう。善悪業にはそれぞれ楽受と苦受があります。天人は楽受を楽しみ、業と果報の二つがあることを見ない愚者は(悪業を恣にして地獄で苦受を受け)煮⁽¹²⁾られます」

しかし餓鬼の応えは、あまり的を射ているとは言えない。善趣または悪趣の来世を信じない (natthikavāda) 者に、善悪がもしないならば来世で善趣悪趣に行く者もいなくなると説くことは意味をなさない。王はただ人界における卑賤高貴の差別のみを、もしその理由を求めようとするならば、見ることができる。この問答の真意は、餓鬼が冒頭に「善悪の果報を見、聞いて信順して下さい」と説くように、既に善悪業と善趣悪趣の果報を信じつつある王に対し、この物語に出る事象を自分でしっかり確認するよう

促したものと考えるべきであろう。

III.4 布施と回向

王は善悪業と果報の因果法則を信順しきれないまま、業の果報を信じる餓鬼がどうして裸体という苦を受けているのかと問う。これに対し餓鬼は偈30で

「私には〔前世で〕自ら行った〔現世で衣服が得られる〕業はありません。ここ〔人界〕には衣服、臥具、飲食を〔比丘たちに〕布施しても、私のために回向してくれる人もいません (datvā pi me natthi so⁽¹³⁾ ādiseyya)」

と二つ理由を挙げる。この中の一つ目については、餓鬼という境遇の特性が示されている。即ち前世で人間であった時に為した悪業が餓鬼としての現世の境遇を作るのであり、餓鬼はその苦果を受けて苦しむばかりで、業の果報が尽きるまでは餓鬼としての生も終わらず、餓鬼の状態ですら新たに善業などを行うこともできない。それ故、前世で次生に衣服が得られるような業を作っていない限りは、餓鬼としての現世で衣服を得るという果報を得ることはできない。

もう一つの理由は、誰かが人界で衣服などを布施した時、餓鬼界の自分のためにと回向してくれれば自分は裸体の苦から救われるのであるが、布施しても、誰も自分のためにと回向してくれないことである。⁽¹⁴⁾これについて註は

沙門バラモンたちに布施をして“そのような餓鬼のためになりますように”と「私のために回向してくれる (ādiseyya)」即ち指定してくれる (uddiseyya) 「人がいない」ということである。⁽¹⁵⁾

と、布施の(功德の)回向の構造を明確にする。布施をする相手は沙門バ

ラモンなど聖者であり、衣服などの施物を餓鬼に直接与えるのではない。住む境界が違うので、それは不可能である⁽¹⁶⁾。そうではなく、布施という善業を行行意思、或いはそこから生じる功德⁽¹⁷⁾を、餓鬼のためにと回向するのである。

王は餓鬼の言葉を聞き、まだ疑いをもちながら、それでも餓鬼が衣服を得られるならばと考へ、偈31でその方法を問う。餓鬼はヴェーサーリ近郊の林に住むカッピタカ長老の名を挙げ、偈36で応える。

「彼〔長老〕にあなた〔王〕が一、二対〔の衣服〕を、私に指定して (mam uddisitvāna) もし布施されるなら、そしてそれらが〔長老に〕領受されるなら、あなたは私にも衣服が身に着くのをご覧になれる筈で⁽¹⁸⁾す」

布施の回向に欠かせないもう一つの要素、布施の受者が、ここに示される⁽¹⁹⁾。布施という善業を成立させ、そこから生じる功德を餓鬼に回向するためには、施主が施す施物を受者が受け取らなければならない。王は餓鬼のため、また自分の業と果報に対する疑いを取り除くため、翌朝、長老に布施を申し出る。偈51に言う。

「その〔餓鬼の〕縁によって私は布施致します。八対の衣服をお受け下さい。これらの布施がヤッカ〔餓鬼〕に届きますように (yakkhass' im' āgacchantu dakkhiṇāyo)⁽²⁰⁾」

「これらの布施がヤッカに届きますように」という言葉が、布施の功德を餓鬼に回向することを意味する。これを受けて長老は偈52で応える。

長老「真に、布施は様々に讃えられます。布施をするあなたに無尽の徳 (dhamma) がありますように。これら八対の衣服を私は領受します。これらの布施がヤッカに届きますように⁽²¹⁾」

長老が布施の受者となり、布施行は成立した。ここで長老は施主である

王を布施という善業を行ったので讃え、更に、餓鬼にこの布施の功德が回向されるように、王と全く同じ言葉を繰り返して願っている。長老も、単に布施の受者としてだけでなく、より積極的な意味でこの布施行に参加したのである。

布施するや否や、蔽かな上衣を纏い鮮やかに荘蔽された餓鬼が、長老と王に姿を見せた。王は自分のたった一回の布施と回向が生んだ果報を目の当たりにしたので、遂に業と果報の因果法則や来世の善趣悪趣を信順する。餓鬼と友人になり、餓鬼の甥を釈放し、更に善業を行うことを決意する。餓鬼はカピタカ長老に教えを学ぼう王に促す。⁽²²⁾

III.5 悪業の果報の消滅

以上で物語が終わるのではない。業報因果と来世を信順するようになったため、王には新たな懸念が生じた。これまで恣に行ってきた悪業の果報を、自分は来世で受けなければならないのかという懸念である。これは Pv の根本的な問題でもある。悪業から生じる来世の苦果を餓鬼の姿で知らしめ、人々に、こうならないように悪業を離れ善業を行うようにと導く Pv の物語は、一方で、善業を行おうと改心しても、それまで積んできた悪業のためにどうせ地獄に堕ちるのであれば善業も無駄ではないかという疑問も生む。⁽²³⁾ Pv はしかし、唯一ここ IV.1 の物語の最後に、悪業が果報を生じる前に消滅し得るといふ教説によってこの問題に答える。⁽²⁴⁾

王の懸念について、餓鬼は既に示唆を与えている。偈62で餓鬼の甥について

「そしてこの者〔甥〕が杭から速やかに解放され、恭敬して教法を實踐するなら、彼はその地獄から免れ、業は他処で感受されましよう (muñceyya so nirayā ca tamhā kammaṃ siyā aññātra vedanīyaṃ)」⁽²⁵⁾

と述べ、甥が来世に受けるべき果報、地獄の苦果が、感受されることなく別の果報に変化、或いは消滅してしまう可能性を示すのである。業果が消滅するための因として餓鬼は、そのままでは何の善業も行えない杭からの解放と、恭敬して教法を実践することを挙げている。しかしこれについて、ここでは更なる問答は為されていない。

王は餓鬼の求めに応じて、餓鬼の甥を釈放し、後日カッピタカ長老に布施した際、餓鬼の甥と自分が受けるべき来世の果報について問うている。まず餓鬼の甥について偈72から73に問う。

「今、私は行き、彼〔餓鬼の甥〕は解放されました。尊師よ、これはヤッカ〔餓鬼〕の言葉によるものです。一体、彼が地獄に堕ちなくて済む方法が何かあるでしょうか？ (siyā nu kho kāraṇaṃ kiñci-d-eva yena so nirayaṃ no vajeyya?) 尊師よ、もしその因があるなら、お話し下さい。信すべきその因についてのお言葉を我々は聞きます。諸業の減すること、感受されることなくこの世で止むことはないのでしょうか？ (na tesam kammānaṃ vināsam atthi aveḍeyitvā idha vyantibhāvo?)」

ここで王の言う「諸業が減する」とは、甥は悪業を行ったのであるが、その果報が来世で「感受されること」がない即ち「この世で止む」という意味である。浪花 [1994] に言う「業果の消滅」の可能性を、王は問うたのである。

業の果報が「感受されることなくこの世で止む」とは、業が果報を結ぶ時期を三種に分類するいわゆる三時業の中で、現世で果報を受ける現法受業 (diṭṭhadhamma-vedaniya kamma) の分は現に果報が現れてしまうのでやむを得ないが、来世以降に果報が現れる次生受業 (upapajja-) と後受業 (aparāpariya-) については、例えば人界または天界の善趣に生まれることによって地獄に生まれ苦しむという苦果を受けることなく、即ち来世

以降で感受される筈であった業の果報が感受されることなく、この世だけで止むという意味である。榎本 [1989] は業果の消滅について、来世で受けるべき果報を現世で「先取り」して受け、来世に残さず「現世で全て消化」することと解釈するが⁽⁷⁾、それは、少なくともここでは当たらない。この世でただ「止む」のである。長老は偈74に答える。

「もし彼が、恭敬して昼夜に怠ることなく教法を実践するなら、彼はその地獄から免れ、業は他処で感受されるでしょう」⁽⁸⁾

これは、餓鬼が先に偈62で述べた言葉そのままである。ここで教法を実践するとは、註によると「以前に為された悪業に打ち勝つことのできる善業」⁽⁹⁾を行うことを言う。即ち以前に積み重ねた悪業よりも影響力の強い善業を敬虔な気持ちで昼も夜も怠ることなく積み重ねれば、ということである。業と果報の相互作用に関する分類に従えば、自果を生じさせる令生業 (janaka-kamma)、他果の生起を支持する支持業 (upatthambhaka-)、他果の生起を妨げる妨害業 (upapilaka-)、他果を破損し自果を生じさせる破損業 (upaghātaka-) の四種の中、以前の悪業の果報が生じるのを妨害する善業または破損し消滅させる善業を積み重ねればということである。ここでは善業の具体例は説かれていないが、現世で行った悪業の苦果が来世で現れる前に、現世で自ら善業を行い、積み重ねて、悪業の果報が生じるのを助け、破損し、消滅させてしまえば、悪業の果報は感受されないものとなるということである。来世の苦果を現世で先取りして現世で苦しむのではなく、悪業による来世の果報が、全く感受されることなく消滅するのである。註は以下のように釈している。

彼の悪業に関して、[次生に]生まれる時に感受されるべき (uppajja-vedanīyaṃ) [果報] は、実に無力の業 (ahosi-kamma, 既有業) になる。一方、次々生に感受されるべき (aparāpariyāya-

vedaniyaṃ) [果報] は、他処にて次々生に感受されるべき果報がある (aññatra...hoti)。[これらは] 今ある輪廻が [次生以降に] 転じるならばという意味である。⁽³⁰⁾

善悪業の果報が現れる三時に関して、餓鬼の甥は現世での苦果については杭に刺され今にも死にそうになることで、既に、少なくともある程度は、受けたと考えることもできる。しかしこれは地獄の苦果に比べれば遙かに軽く、来世の分を「先取り」するには到底足りないと思われる。

今、註釈は来世とそれ以降の果報についてなされている。長老はただ「業は他処で感受される」とだけ応えているが、註は、来世については ahosikamma の語を用い、来世以降について、他処で果報があるとする。しかし ahosikamma は、業果が消滅し、果報が生じないことを意味するので、ここでは来世とそれ以降のいずれにおいても業の果報が現れない、消滅したことを指すと考えてよい。

「輪廻が転じるならば」と条件が付いているのは、偈87から88で明らかにされるが、解放された後カッピタカ長老について出家した甥は、修行を完成させアラカン果を得ており、来世以降に輪廻転生し業の果報を受けることはアラカン果を得た彼にはあり得ないので、この議論は輪廻する者についてのみ当てはまるということを註釈するのである。アラカン果を得るまでの修行や戒律など出家者として行った行いがそれまでの悪業の果報を消し去るには十分な善業であったと考えることができるので、以下に王の例でも見るように、悪業の果報が生じる前により強い善業を行って消滅させることが、ここ Pv IV.1に説く業果の消滅であると言える。⁽³¹⁾

偈75で王は自身の業についても同様に問い、長老は偈76から81で同様に応える。

王「私は地獄に堕ちないでしょうか？」

長老「仏法僧に帰依し、五戒を欠けることなく保ち、八齋戒を受持しなさい。法衣、飲食、臥座具などを敬虔な心で比丘たちに布施しなさい。常に功德が増長します。このように教法を実践して恭敬して昼夜に怠ることがなければ、あなたはそ⁽³³⁾の地獄から免れ、業は他処で感受されるでしょう」

王と出家してアラカン果を得た甥の異なる点は、王が出家ではなく敬虔な在家信者になったことである。甥についてはただ「怠ることなく教法を実践するならば」地獄から免れると説かれるだけであったが、王の場合は在家信者の行うべき善行の徳目が挙げられている。それらは布施行と在家の戒即ち三帰依、五戒、八齋戒⁽³⁴⁾である。ここで長老は戒の項目の一つ一つまで唱え、王は偈82から85にそれを繰り返して唱えて受持する⁽³⁵⁾。これら布施、持戒などの善業を行い続け、積み重ねることが、以前に行った悪業の果報を破損、消滅させ、牽いては善業の果報のみを生じさせることになるのである。

王の場合には苦果を現世で、些かでも受けた或いは「先取り」したという記述はない。悪業によって王が受ける筈の苦果は、ただ消滅したのである。より正確に言えば、王自身が新たに作った善業によって、それまでの悪業を、果報が生じる前に消滅させたのである。

以上の善行を怠ることなく実践したアンバサッカ王は、在家のまま預流果⁽³⁶⁾を得た。預流果は聖者の四つの段階の最初の位であり、既に悪趣に堕することのなくなった位であるので、地獄に堕ちる業は果報をもたらずことなく消滅したと言える。ただ、現世でアラカン果に達した訳ではないので、王の場合は来世以降もまだ何度か転生を繰り返すことになる。しかしそのいずれの生においても、感受されるべき地獄の果報は既に消滅している。王もまた、甥と同様に、自ら犯した悪業の果報を、自ら作った善業の力で

消し去ったのである。

物語は、ヴェーサーリ随一の在家信者であり、信心深く穏やかで比丘サンガに奉仕し預流果を得たアンバサッカ王と、自ら出家しカピタカ長老に仕えアラカン果を得た甥の両者を讃えて終わる。

IV 結 論

Pv IV.1は、餓鬼を例に悪業の果報の恐ろしさと善業の果報の偉大さを説き、在家信者に、善悪の行いには必ず果報があることを示し、人々が悪業を離れ善業に親しむようと物語を進めた。長老が積極的に説教するのではなく、自分の幸福を得たいのなら自分は何をすべきかということ、物語を聞いた人々が自ら学び取れるようにして、信者が自ら育っていくことを目指した教化のあり方である。

Pv IV.1の教説で最も注目すべきは、業果の消滅であろう。これまでどんなに悪業を行っていても、現在から努力し善業を行うことによって、将来受けるべき苦果を楽果に変え得るという教説である。これは、善悪業とその果報を信じる信者にこれまでの悪業を徒に悩むことなく、これからの行いを善業になるようにしっかりと行うことを勧める Pv の理論的根拠となっている。

尚、業果の消滅が業果の必然性の教説と矛盾するのではないかという考えが学者の間に根強い⁶⁷⁾が、この疑問は善悪業とその果報を静的に一対一対応のように解釈したために起こったものではないだろうか。実際には、仏教で説く業論は動的に複雑に作用し合う。善悪業には強弱があり、果報が生じる時期も異なり、一つの業が他の業に影響を与える。また、一つの果報は新たな業因となり、それから更なる果報が生じる。悪業の果報が生じる前に、後から行った善業によって消滅したのなら、それがその場合に必

然的な果報だったと言すべきではないだろうか。経論に説かれている文言をそのまま読むなら、少なくともそれが、歴史上のではないとしても、文献上の事実として是認されるのではないだろうか。究極的な業の滅として、我々は解脱、アラカン果の例を知っている。業果の一つ一つのはたらきを、凡夫の我々の知的探求だけで自ら如実に知ることは困難であるが、宗教的に闇雲に信じたり、仏教の本義でないで軽んじたりするのではなく、この物語に出るアンバサッカ王のように、見、聞いたものを一つ一つ確認していくべきではないだろうか。

注

- (1) 他には I.1, I.10の註の部分に悪業の果報の消滅が暗示されているだけである。
- (2) Malalasekera, G. P., *Dic. of Pāli Proper Names* (PTS, 1938, rpt. 1997), vol. I, pp. 160-61 にはアンバサッカ王について PvA IV.1の記述しか挙げていない。架空の人物であろうか。
- (3) 浪花 [1994] は、初期経典では業の果報の消滅が明確に記されていると言いが難く、業果は消滅することがあるという明言を得るには註釈文献 (Aṭṭhakathā) を待たねばならないとする (浪花宣明「パーリ上座部の業論 (1)」『仏教研究』[国際仏教徒協会] 第23号 (1994)。) が、Pv IV.1には明示されている。
- (4) Hardy, E., *Dhammapāla's Parmattha-Dīpanī part III being the Commentary on the Peta-vatthu* (以下 PvA と略す) (PTS, 1894), p. 215, l. 9-p. 217, l. 31 取意。
- (5) *Ibid.*, p. 218, l. 1-p. 244, l. 4 取意。
- (6) *Ibid.*, p. 224, ll. 1-28 取意。
- (7) 現世の業因から来世の果報を予想する記述は Pv には少ない。IV.1以外には II.7, III.1に、また予想に基づいて善業によって既に為した悪業の果報を減じよう或いは減しようとするものは、I.1, I.10 (註の部分) にのみ見られる。
- (8) PvA, p. 218, l. 1-p. 222, l. 2 取意。
- (9) *Ibid.*, p. 234, ll. 5-18.

- (10) Ibid., p. 225, ll. 1-12 取意。
- (11) 例えば偈21では餓鬼は王に自分の悪業が戯れのためであったと説き、偈49では王が長老に自分の悪業は戯れのためであったと強調している。
- (12) PvA, p. 226, l. 13-p. 228, l. 15 取意。 *Cūḷakammavibhaṅgasuttaṃ* (小業分別経) (*Majjhima-Nikāya* [PTS, 1896, rpt. 1993], vol. III, pp. 202-06) を想起させる内容である。
- (13) PvA, p. 228, ll. 18-20 (偈30 abc 句)。
- (14) 輪廻の五趣の中で餓鬼にのみ布施の回向が届くことについては、Pv I.5の註 (PvA, p. 27, l. 15-p. 28, l. 27) に *Āṅguttara-Nikāya* (PTS, vol. V, p. 269, l. 5-p. 271, l. 2) の積尊とあるバラモンの対話を引用して論拠としている。
The Milindapañho (PTS, pp. 294-97) は AN と同様の議論を挙げ、更に餓鬼をその生存のあり方について四種に分け、その中で他者の布施によって生きる餓鬼 (petā paradattūpajivino) にだけ、しかも彼らが (それについて) 憶念している時にだけ (te pi saramānā yeva), 布施の回向が届くと説く。
- (15) PvA, p. 228, ll. 26-28.
- (16) 例えば PvI.10の偈3-5 (PvA, p. 48, l. 25-p. 49, l. 23) では上着を与えようとする男に餓鬼女が「手から手へとあなたが与えるものは、私には役に立ちません」と断っている。また II.7の註 (PvA, pp. 104-05) では渴きに苦しむ餓鬼に直接水を飲ませようとして失敗している。
- (17) 布施の施物そのものではなく布施行から生じる功德 (puñña) を餓鬼に回向すること、或いは布施行を行う意思 (cetanā) が餓鬼の利益となることについては、PvI.1とその註 (PvA, p. 6, l. 30-p. 9, l. 17) に詳説されている。また拙論「*Petavatthu-Atthakathā* について」『印度学仏教学研究』第48巻第1号 (95) を参照。
- (18) PvA, p. 230, ll. 1-4.
- (19) 布施に関わる三者については前出の PvI.1を参照。
- (20) PvA, p. 235, ll. 4-6 (偈51 bcd 句)。Pv は dakkhiṇā と dāna を同義に取る。PvA, I.4 (p. 18, l. 28) の Dakkhiṇā ti dānaṃ 等を参照。
- (21) Ibid., p. 235, ll. 7-10.
- (22) 偈56から69 (PvA, p. 235, l. 23-p. 238, l. 4) に詳説される。尚、物語には出ないがこの段階で王の不邪姪の企みも王自ら断念し、王が処刑しようとした男も放免されたと考えられる。
- (23) 実際には、悪業が必ず苦果を、善業が必ず楽果を生むと仮定しても、その場合には前に行った悪業の苦果を地獄で味わった後で、その後に行った善業

の果報が楽果として現れるのであるから、それまでの悪業がどれだけあっても、結局、その後で善業を行うことはその分確実に自分の利益になるのであり、善業を行うことが無駄になることは決してない。しかし現実には、自分の来世、すぐ次の生が地獄で苦果を受けることに決まっているという衝撃は大きく、それを何とか免れたいと、まず考えるのであろう。

- (24) 悪業の消滅について、その語義を明確にするため、本稿では浪花宣明 [1994] の「業の消滅」と「業果の消滅」の定義に従う。即ち「業の消滅」と言う場合は、全く何も行わないのではなく、その行いが善悪の果報を作らないような行い、端的にはアラカンの「唯作」を指し、「業果の消滅」と言う場合は、善悪の業を行ったのであるが、その苦楽の果報が現れなくなる、または現れなくすることを指す。
- (25) PvA, p. 236, ll. 20-23.
- (26) Ibid., p. 238, ll. 13-20.
- (27) 榎本文雄「初期仏教における業の消滅」『日本仏教学会年報』第54号 (1989)。
- (28) PvA, p. 238, ll. 21-24.
- (29) Ibid., p. 242, ll. 26-27.
- (30) Ibid., p. 242, ll. 27-31.
- (31) Ibid., p. 240, ll. 9-16.
- (32) 悪業を行った甥が後にアラカンになる話は、アングリマーラの話 *An-gulimālasuttaṃ (Majjhima-Nikāya* [PTS, 1896, rpt. 1993] vol. II, pp. 97-105) を想起させる。アングリマーラの場合も、九百九十九人殺した悪業の果報としては、托鉢時に投石されるくらいでは少な過ぎよう。これも、悪業の「先取り」というよりも、アラカン果を得るに至る、より強力な善業によってこれまでの悪業から生じる筈の果報を消し去ったと解釈する方が自然ではないだろうか。榎本 [1989] を参照。
- (33) PvA, p. 238, l. 25-p. 239, l. 18 取意。
- (34) Pv で勧められる善行は専ら布施行 (二十三話に出る。偈に出るものは I.1, 4, 5, 10, II.1, 2, 4, 3, 8, 9, III.1, 2, 6, IV.1, 3, 註のみに出るものは I.6, 9, II.7, 11, 10, IV.5, 12, 14) であり、布施行を説く物語の中の二話のみが三帰依五戒にも触れる。しかしその一つである IV.3 は名を挙げるのみである。
- (35) PvA, p. 239, l. 19-p. 240, l. 4. この中、不邪淫戒については通常の表現 *kāmesu micchācāra veramaṇī* ではなく、ジャイナ教にも共通する *sakena dārena ca hohi tuṭṭho* (自分の妻に満足しなさい [偈77 d 句]) を用いてい

るが、これはアンバサッカラ王の不邪姪の企てに沿ったものと言える。

③6) 偈86-88。PvA, p. 240, ll. 5-16.

③7) 例えば、平岡聡「『ディヴィヤ・アヴァダーナ』に見られる業の消滅」『仏教研究』（国際仏教徒教会）第21号（1992）はこの「矛盾」を、業説自体が通俗的なもので佛教の中心教義ではなく、衆生を悟りに導くための方便に過ぎないから、悪を行いそうな者には業果の不可避性を説き、悪を犯し悔い改めている者には業滅の可能性を示唆する必要があったと見る。

また、前掲浪花〔1994〕は両者の「矛盾」を、業論が客観的実在ではなく倫理的宗教的要請であるから、客観的に確かめることのできないこの事柄を、人倫の保持のためには信じる以外に方法のないことであると見る。